

人
あり

近江八幡市永原町上の重要伝統的建造物群保存地区にある昭和初期の町屋を改装した

ユージア・ノーリー・マラ。一步入ると青色のスツヅ染の女性を描いた絵が何枚も飾られている。障害がある人もない人も分け隔てなく表現や作品を紹介する施設で、学芸員として勤めて10年目になる。

開催中の「ボーダレス・エリヤ近江八幡芸術祭」では、障害のある人々と美術の専門教育を受けていない人々によるアール・ブリュット（牛の芸術）「作品と現代アート」を展示。「ジャンルを超えて見る人にインパクト（衝撃）を与えない」と狙いを語る。

幼い頃から美術に関心を持ち、大津市の成安造形大に進学。現代アートを主攻した。空間全体をへり掛けのよう表現するインスタレーションの制作などに励んだ。食費を削っては材料費を捻出する毎日。いつしか生活は荒れ、下宿は足の踏み場もないほどだった。

近江八幡の美術館「NO-MA」学芸員

横井 悠さん 36



展示作品を前に「ボーダーを超えたい」と話す横井さん（近江八幡市）



17年に企画した展覧会で

アートなど、創作に打ち込んだ
み、すでに足を運んだ。出展者
I-Mにも足を運んだ。出展者
に障害者もいることは知
っていたが、そんなことは関係
なかった。「新くて面白い。
作品そのものを楽しめた」。
現代アートの作品に感じたの
と同じような衝撃を受けたと
いい、「面白い芸術作品は
誰が作っても面白いんだ」と
魅力を感じた。

アートに携わる仕事をする
将来、創作の道に進むか、

か卒業後も決めかねでして、OMAに指導教官から「あなたがわざわざ仕事に就かなければいけない」と説かれた。教官はNOIMAの設立準備に加わった人物。学芸員の資格はすでに持っていた。「展覧会をして企画したり、制作者としても関わったりでききそうだ。」2010年9月、NOIMAを運営していた県社会福祉事業団に就職した。「今思つて、縁があつたのかかも」と不思議な感覚になる。

なく、福祉の知識も必要なところではあります。発達障害の子どもたちがいそがしく、グループホームに泊まり込んで、コミュニケーション・ケーションの取り方を学んだ。国内外の福祉施設で芸術活動に取り組むむちたちの調査にも取り組んだ。

作品の出展は、本人に納得感をしてもらひて初めて実現できることと考えるが、意思表示が難しい人も少なくない。家族や福祉施設の担当者と話しあい、何とか本人の意思を確認

芸術でボーダー超えたい

は、毎日一枚、コピー用紙にど
ンク色の階段を描き続ける吉
田格也さん(神戸市)の作品
「天国 暗段」を展示した。吉
田さんは今から7年ほど前、

三重県四日市出身。県社会福祉事業団から移行した社会福祉法人グロー法人本部の学芸員として、2004年に開設されたボーダーレス・アートミュージアムNO-1MAの展示企画等に取り組む。「ボーダレス・エリザ近江八幡美術館」は1月24日まで同ミュージアムなど旧市街地会場で開催中。毎晩休憩。一般1000円、高校生900円、中学生以下無料。問い合わせは同ミュージアム(0743-36-0044)。

近六幅藝術

卷之三